

長崎くんち考 城下町祭礼の変遷とその意味

久留島 浩

Nagasaki Kunchi Festival Reconsidered: The Nagasaki Kunchi as Castle Town Festival

はじめに

- ①城下町の東照宮祭礼を取り上げる意味
- ②絵画史料から長崎くんちを読む
- ③「長崎諏訪神社祭礼図屏風」
おわりに

【解説】

現在では十月七日一九日に行われる長崎くんちは、近世初期に始まって以来、幾多の変遷を経てはきたものの、いまなお観る人々・演じる人々の双方を魅了してやまない代表的な祭りのひとつである。国立歴史民俗博物館では、二〇〇一年度に「民俗研究映像『風流のまつり 長崎くんち』」を作成したが、その過程で、近世以来多くの長崎くんちに関する画像史料が残されていることがわかった。とくに館蔵「長崎諏訪神社祭礼図屏風」は、一九八五年に購入されて以来、「神社参詣図」という表題がついてきた」ともあるが、収蔵庫で眠っていたが、今回の映像作成過程で陽の目を見ることになった。そこで、小稿では、まず、この屏風を少ていねいに紹介することにした。あわせて、他の画像史料から、近世の長崎くんちの特色を読みとろうとした。

一方、近世都市祭礼のうち、近世になって創られた都市＝城下町に近世初期（おおむね十七世紀なかば）に導入されたのが東照宮祭礼であり、この祭礼を検討するため

で、近世城下町祭礼の特質を考えることができると考えた。そこで、岡山・鳥取・和歌山・名古屋の東照宮祭礼の特色、就中城下町祭礼としての共通項について、これまでの先行研究の成果から抽出した。この抽出結果と、画像史料から読みとった長崎くんちの特色とをくらべたところ、重なる点が多いことがわかった。

現在の長崎くんちは、近世に比べると神事能や流鏑馬などを欠いており、近世城下町祭礼であったことがわかりにくくなっているが、以上の検討から、近世の長崎くんちは、典型的な近世城下町祭礼の一つであると考えるにいたった。